



まるっと、早わかり！！

庄内の戊辰戦争

～ 鶴岡市郷土資料館「庄内の戊辰戦争展」から ～

はじめに

当館では、「明治 150 年」または「戊辰 150 年」にあたる平成 30 年度に前期（平成 30 年 5 月 20 日～7 月 29 日）と後期（平成 31 年 1 月 12 日～5 月 12 日）の 2 回に分けて、「庄内の戊辰戦争展」と題した企画展を開催いたしました。

会津藩と共に慶応 4 年（1868）4 月に征討の対象となった庄内藩は、時代の煽りを受け、藩士はもちろんのこと、町人・農民・寺社等に至るまで、領内全体が大きくなうねりの中に巻き込まれていきました。このため、当館で所蔵する慶応 4 年、あるいはこの年にまたがる史料については、ほとんどが戊辰戦争に関する記述が中心になっています。当館では、それらの史料を改めて調査し、前期後期合わせて約 180 点の史料を紹介いたしました。本紙は、従来の概説書・研究書の成果と、前後 2 回の展示を通して見えてきた新しい史実をできるだけ簡潔にまとめた内容となっております。庄内藩がどのように行動し、どう決断したか、骨子となる部分を読み取っていただければ幸いです。

また、「戊辰 150 年」の一年が終わったことにより、戊辰戦争研究が終息に向かうのではなく、様々な史料発掘がなされたこれからこそ、さらなる庄内の幕末維新史研究が発展する可能性が開かれたと言えます。当館では、一過性のブームに流されることなく、折々に「庄内の戊辰戦争」を考える機会を提供できるよう、今後とも、展示等を通して情報発信できるよう、努めてまいります。

平成 31 年 1 月 鶴岡市郷土資料館

※今回の作成にあたり、主に下記の図書を参考にしました。本紙と併せて、こちらをご覧ください。

- ・和田東蔵『戊辰庄内戦争録』（2010 マツノ書店）
- ・大山柏『補訂戊辰役戦史』（1988 時事通信社）
- ・阿部博行『庄内の戊辰戦争』（2018 庄内日報社）
- ・『改訂新版 戊辰戦争全史』（2018 戎光祥出版）
- ・保谷徹『戊辰戦争』（2007 吉川弘文館）
- ・『戊辰戦争の新視点』（2018 吉川弘文館） 他

1 幕末期における庄内藩の変遷

（1）相次ぐ幕命と幕府との関係

庄内藩は、天保 11 年（1840）の川越藩・長岡藩との三方領知替えから端を発して、天保 14 年（1843）の印旛沼堀割普請、天保 15 年（1844）の庄内・由利天領 2 万 7000 石余の預地支配（「大山騒動」の原因となる）、安政元年（1854）品川五番台場警備、安政 6 年（1859）蝦夷地（ハママシケ・ルルモツペ・テシホ・トママイ）警備経営と相次ぐ幕命が下され、さらには文久 3 年（1863）に江戸市中取締を命じられ、新徴組・大砲組（後の新整組）を委任されることになる。この江戸市中取締に伴い、江戸には松平権十郎をはじめとする藩士が数多くに出府し、蝦夷地警備に赴いていた藩士と合わせ、この時期の庄内藩は鶴岡・蝦夷・江戸という三元体制を施していたことになる。

また、元治元年（1864）8 月 18 日には、庄内・由利天領 2 万 7000 石余を増加されるものの、3 日後の 21 日には第一次長州征伐の先手を命じられることになる。幸い江戸市中取締に専念するため、同年 9 月 24 日には長州征伐は免除されるが、このように動乱期とはいえ、藩主・藩士以下、大きな負担を強いられる相次ぐ幕命に翻弄されることになる。こうした状況の中、江戸市中取締に従事するため、組頭として出府していた松平造酒助は、「徳川家の末ともうすべきや」（元治 2 年 3 月 9 日付書状）と国元へ書き送るなど、江戸詰め藩士たちは幕府の失墜を目の当たりにしていた。その一方で、この江戸市中取締により、庄内藩士の大半は江戸に出府を経験し、廻り際には集団で 1 日 30～40 km の距離を歩くこととなり、いつ何時事件に遭遇するかわからない緊張感を体験することになり、結果的にこの体験が戊辰戦争に活かされることになった。

（2）領内の不穏分子とその粛清

慶応 2 年（1866）9 月 20 日に下山王神社の鳥居に「窮民の者、当二十八日夜、当社境内に参集すべし」という建札が掛けられ、28 日当日には各通りから多数の百姓たちが参集したという。この「山王神社打ち寄り」の翌日より日下部宗伯・深瀬清三郎らの捕縛が始まり、11 月には大山庄太夫が自宅監禁とされ、1 月には家老経験者である酒井右京・松平舎人も謹慎を命じられる。俗にいう「大山庄太夫一件」であるが、翌年 9 月 11 日に 29 人に対して死罪・謹慎・減知などの処罰が下ることになる。これと相俟って、同年 10 月 29 日には江戸豊島町小玉ヶ池で大砲組のリーダーだった小林登之助も長州に通じていたとして斬殺され、さらにはカンパニー設立の資金集めのため、薩摩から酒田へ帰郷していた本間郡兵衛も幽閉され、後に毒殺される。このように慶応 2 年以降、藩では疑わしい動きを取る者たちを粛清する方向を取ることとなり、慶応 4 年段階で藩の方針に対する表立った不平分子は現れなかった。